

芸術文化

Musashino Art University Department of Arts Policy and Management

2014

THE ART TRIP

ゲイブン生は旅をする。

仕掛けよう！

- 世の中はもっと面白くできる -

芸術文化

Musashino Art University Department of Arts Policy and Management

CONTENTS

THE ART TRIP

ゲイブン生は旅をする。

- 02 ゲイブン名物！！
新見教授のニューヨーク遠足
- 05 [コラム1] アートを素食大食美食の、
極寒ニューヨーク - 新見 隆
- 06 自然とたわむれる旅。カミヤマート

What is Geibun?

- 09 教員紹介
- 10 授業紹介 - 林家たい平「芸術文化論Ⅰ」
- 11 カリキュラム紹介
- 12 卒業生紹介
- 14 就職情報
- 15 入試情報 - ゲイブンで学ぼう！
- 16 ゲイブン用語集

仕掛けよう！

～世の中はもっと面白くできる～

- 18 府中の森芸術劇場デザインワーク
- 20 ちひろ美術館とのコラボレーション
- 21 [コラム2] 絵本の独特の表現は、
言葉とイメージの相互作用から生まれる。
- 今井良朗
- 22 ゲイブンを飛び出して、
展覧会をプロデュースする！
- 24 府中市美術館リーフレット
編集プロジェクト

THE ART TRIP

特集 1

ゲイブン生は旅をする。

前後の脈絡はどうにも曖昧なのに、たとえばある映像、ある感触だけが、

突出したリアリティをもって甦る旅の記憶がある。

おぼろげでありながら、妙に深く心に刻まれた旅・・・

日常の退屈な観念や概念を溶かしてくれる旅・・・

弱気になった自分を強靱に再生してくれる旅・・・

旅によって、わたしたちは、様々なできごとや生命がこの世界に息づいていることを知る。

旅に出かけてみるだけで、いつもと違うものが見えてくる。

旅はアートであり、アートは旅である。

Good Trip !!



1. ニューミュージアムのワークショップに参加していたおじさん。 2. ホテルの前で学生たちを見送る新見教授。 3. クイーンズにひっそりと建つノグチ美術館へむかう。 4. F・L・ライト設計の、グッゲンハイム美術館正面。 5. ノグチ美術館で、学芸員のスペシャルトークを聞いた後、自分たちの眼で作品を見てまわる。 6. MoMAのRoger Griffithさんの話に聞き入る学生たち。 7. 宿泊したウェリントンホテルは、ニューヨークの中心に位置する。 8. タイムズ・スクエアは、活気と喧噪、エネルギーにあふれている。



本場の味を知る。だから、ニューヨークに。

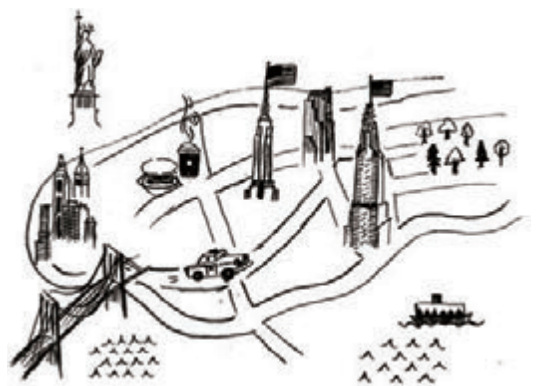
2014年2月19日、ニューヨークのJ・F・ケネディ空港に48人のゲイブン生が降り立った。到着して感じた一瞬の開放感。しかし、ニューヨークの空気に触れ、これから始まる体験の前に、それはすぐ緊張感に変わった。4泊6日の「ニューヨーク遠足」は、世界中から人々が集まる、芸術文化の中心地を五感で体感する弾丸ツアーだ。前日より気温が10度も上がったのは、この街が彼らを歓迎してくれたからだろうか。とはいえ、気を引き締めないと、すぐにニューヨークの巨大なエネルギーに飲み込まれてしまう。

このツアーの目的は、ニューヨークが世界に誇るミュージアムを訪れ、多彩な作品とそこで働く人々、それらを包む場に出会うことにある。美術の魅力は作品そのものが持つ力から生まれるが、そこに環境の魅力がともなうと何十倍にも増大する。芸術文化の長い歴史の集積を感じるためなら、パリやロンドンといった、ミュージアムが生まれた地を巡るのが順当だろう。では、なぜニューヨークなのか？アメリカという新大陸で、文化なきところに文化を作ってきた人々。今も次々と生まれる「生きたアート」が果たしてきた役割。それらに出会い、そのカオティックでリアルな現場から、人として生きる力を学んではいい。この遠足はそうしたい思いから生まれた。

学生たちは、少しずつ渡航費を貯めてこの遠足に参加する。「ミュージアムを体感することは、世界全体を体感すること」と語る新見教授。「遠足」というのはのびのびとした響きとは裏腹に、実に内容の濃い「学びの旅」。さあ、何をどう見て、何を自分の血肉とするのか。それは、学生自身の眼にかかっている。



ニューミュージアムで行われていた、ワークショップの様子



ゲイブン名物!!
新見教授のニューヨーク遠足

世界のアートの中心地を体感し
リアルな現場から、生きる力を学ぶ

担当教授：新見 隆・杉浦幸子



アートを素食大食美食の、極寒ニューヨーク。

モウモウとあがるボイラーの蒸気に、焼栗の香り、アスファルトの匂いが交じる。世界一のスピード都市、ニューヨークを闊歩する冬。航空チケットが安いだけじゃない。ブロードウェイのミュージカル、バレエにオペラにコンサート、夜の文化活動が目白押し。生牡蠣、店で味のちがう手づくりハンバーガー、ロブスターのサンドイッチ、うどんみたいなチキンスープとかピクルス、ユダヤ風味満載デリの買い食い、面白カップケーキ、コーヒー歩き飲みなど、ヴァリエティ満載のアメリカ食は、楽しい。MoMA、MET、グッゲンハイム、

DIA:BEACON と、学芸員修復家たちプロの話をきき、近現代美術、世界の文化遺産のお宝群、アール・デコ摩天楼に名匠ライトのユニーク建築、ミナマル・アートの巨大展示殿堂まで、身体いっぱい、吸い込んで学ぶ。けれど芸文的研修旅行は、物見遊山で終わらない。人種の坩堝たる世界都市紐育で、「自分の文化を体現しないと成らないのだ」というミッション、グローバル化のなかの個人の義務、「如何に文化を生み出すか」という芸文的使命を、改めて肝に銘じる旅なのだ。そして、人生そのものが、旅、だからね。



NEW YORK MAP



NEW YORK 研修旅行記



信田光穂
SHINTA Mitsuho
3 年生

ゲイブンの新見先生が2年に1度企画する「NY研修旅行」。ニューヨークを肌で感じ、美術館関係者のお話を伺う、またとない機会である研修の様子を、日記風に紹介しよう。

Wednesday, February 19

約12時間のフライトを終え、J.F. ケネディ空港に到着。ホテルにチェックインしたその足で、The Whitney Museum of American Art (ホイットニー美術館) へ向かい、アメリカが生んだエネルギーに満ちた作品を鑑賞する。解散後、ニューヨークの観光名所、タイムスクエアへ。ビルに取り付けられた液晶画面から絶えず流れ出す光を全身に浴びて、やっと、ニューヨークにきたことを実感した。

Thursday, February 20



ニューヨークは想像より暖かく、The Noguchi Museum (ノグチ美術館) へ向かう道に、溶け出した雪が水たまりを作っていた。彫刻家のイサム・ノグチ自らが設計したアトリエを美術館にした館内で、学芸員のDakin Hart さんのギャラリートーク

を聞く。こじんまりとした空間に、見応えのある大きな作品が並び、不思議と圧迫感を感じない。昨日タイムスクエアで味わった緊張感を、そつとほぐしてくれるようだ。新見先生によると、作品の配置はノグチ自らが考えたとのこと。だからこの館全体が一つの作品のように調和し、ゆったりとした時間を感じることができたのかもしれない。正午前、気温がさらに上がり、足取りも軽く、MoMA (ニューヨーク近代美術館) へ。1階から6階まで、ゴッホ、ピカソから現代アート、建築、プロダクトまで、膨大な作品が埋め尽くされている。F・L・ライト展の外で、MoMAで修復の仕事をしているRoger Griffinさんからお話を伺う。駅のようなエントランス、明るい展示空間、作品の前で記念写真を撮る人々。MoMAのあるミッドタウンはオフィス街、ビジネススマンが屋台に長い列を作っている。日本の美術館にはない光景は、私の美術館のイメージを覆した。

Friday, February 21

寒さに凍った真つ白なハドソン川を車窓から眺めながら、小旅行気分です。DIA:Beacon (ディア・ビーコン) へ。工場だった広大な建物の中に現代アート作品が設置されている。マンハッタンから2時間弱。普通の観光旅行だったら、ここまで来たであろうか。今回の旅行だからこで、来るべきことがあった。午後はマンハッタンに戻り、Neue Galerie (ノイエ・ギャラリー) へ。館長のRenske Priceさんのスライドを使用したレクチャーは、英語が苦手な私でも理解できた。その後、2階の展示室へ。20世紀初頭のオーストリア、ドイツを中心とした展示空間には、絵画だけでなく、

同時代の調度品も展示され、当時の空気感を堪能した。

Saturday, February 22

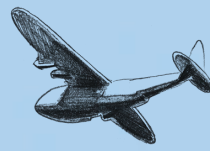


最終日。午後1でMetropolitan Museum of Art (メトロポリタン美術館) へ。光が降り注ぐオーデトリウムで、修復家の山崎・クレプス・晶子さんから海外で仕事を始めたきっかけを伺い、目から鱗が落ちた。海外で仕事をする選択肢が、自分の中に全くなかったからだ。自分の視野が日本から世界へぐんと広がった気がした。研修旅行の最後は、夕暮れに浮かび上がるGuggenheim Museum (グッゲンハイム美術館) へ。土曜日の夜は無料入館できるとあって、「未来派展」を見ようという人が列を作っていた。ニューヨークでは、多くの美術館が無料開館をおこなっている。日本に比べて、芸術に親しむ環境が整っていると感じた。4泊6日で7つの美術館を巡る、アート漬けの強行軍だったが、ニューヨークの芸術文化を体感し、日本の芸術文化と比較し、広い視野で物事を考える貴重な体験ができた。この旅から得たものは、数えきれない。

PROJECT PROFILE 2013

- 人数 / 48 名 (1, 2 年生対象)
- 形式 / 研修旅行
- 期間 / 4 泊 6 日
- 分類 / 過渡

いざ、徳島!

あおい
空

行けばわかるよ。
神山の大自然。

みどりの
山つめたい
川やさしい
おじちゃんとおばあちゃん

上分中学校の前に広がる、大きな青空と木々繁る山

自然とたわむれる旅。カミヤマート



学校を出ると、分かることがある。
人と出会うと、気づくことがある。

担当教授：米徳信一・是枝 開

徳島県神山町で毎夏行なわれる造形ワークショップがある。その名もカミヤマート。大自然の中でアートする楽しさや、ワークショップの魅力をゲイブンの教授二人に語ってもらいました。

カミヤマートってなに？

是枝…僕はこの3月まで美術館で学芸員をしていましたが、4月からゲイブンの教員になりました。なので、ゲイブン一年生として、このカミヤマートが初めてのプロジェクトです。これは、いつ、どうやって始まったんですか？

米徳…1999年にゲイブンが生まれたと同時に始まったプロジェクトで、今年で14年になります。回数としては、年に2回やった時もあるので、それ以上ですね。当時、神山町を含めた、4つの地域を対象とした「国際文化村構想」というプランを、徳島県とムサビが一緒に作ったことから始まりました。そこから生まれて、今でも続いているのが、このカミヤマートです。ちなみにこの名称は、神山とアートを合体させた造語です。

是枝…なるほど。年に一回、徳島でアートをやる旅に出るんですね。

米徳…そうです。毎年、僕たちゲイブンの教員と学生が、徳島の子どもたちを造形の世界に誘う企画を考える。そして、夏休みの2日間、徳島に飛んで、神山町の上分中学校という休校になった中学校で、徳島の子どもたちと一緒に、話したり、何かを作ったり、遊んだりする、ゆるやかなワークショップをします。

是枝…地元の方との関わりはありますか？
米徳…神山町には、このプロジェクトの実行委員をしていてくれる方々がいるのですが、

その中心メンバーは、山口さん、三角さん、西森さん。全員がほぼ同じ年代で、上分中学校出身。カミヤマートが始まった時から縁の下のような感じで、ずっとプロジェクトの実務を担当してくださっています。

ワークショップは、生きた学び

是枝…米徳さんは、カミヤマートの前もいろいろなワークショップをしていたんですか？
米徳…いえ、カミヤマートが初めてです。それまではワークショップって、「みんなが集まって、何かモノを作って楽しむことかな」と思っていました。でも、作り手の表現をマネジメントしたり、プロデュースすることを学ぶゲイブンに来てから、だんだんとワークショップという学びの手法に興味を持つようになって、カミヤマートをやる中で「これは重要だな」と思うようになってきました。

是枝…学生との企画の話し合いでは、ワー

クショップのタイトルやサブタイトル、キヤッチフレーズを決めたりしていますが、現場感覚が磨かれますね。僕も美術館のワークショップで、子どもから年配までの幅広い参加者や、いろいろなアーティストと関わる中で、自分自身を知ることができたと感じています。

米徳…是枝さんがワークショップをする時に大切だと考えていることはありますか？

是枝…ワークショップには、みんなと一緒に何かをすること、人の考えを知って、そこに「驚き」や「気づき」を感じる良さがあると思いますが、それとともに、参加する人たち一人一人の個を大切にしたい、いつも思っています。そして、それは企画する僕たちにとっても重要で、集団で企画を考える時間と、それぞれの学生がそれをどう表現するか一人で考える時間も大切にしてほしいと思っています。モノを一人で創り出す時のような感じですね。

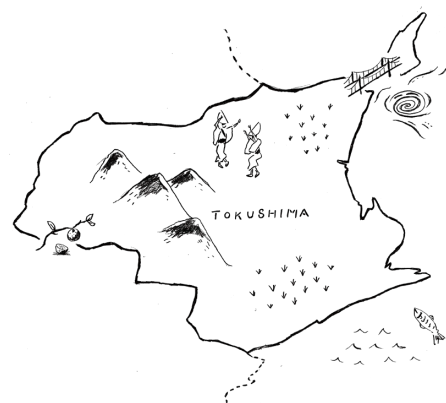
米徳…僕は専門が映像なので、学生たちに、映像を使ってワークショップを記録して、

それを自分なりに表現してほしいと思っています。なかなかこれが難しいのですが、2年前くらいから、学生たちが自分にとって何が面白いのか素直に考えるようになったので、単なる記録映像からだんだんと彼ら自身の表現が生まれてきているなど。これは、ちょっと嬉しいですね。

旅が生み出す空気感

是枝…学校を出て旅をする、ということが、そこに関係しているのかもしれないですね。

米徳…カミヤマートにとって、環境の影響は大きいですね。山があつて、川があつて、日差しが強くて。海外への旅に比べたら小旅行ですが、着くと大自然が広がっていて、空気が変わる。行ったことのない学生は、神山に行くまでそれを想像するしかないんですが、行くとそれが体で分かる。「ああ、こういうことだったんだ」と。経験した学生が初めて行く学生に「行けば分かるよ」と言うんですが、まさにそうなんです（笑）。



5

1. この年のテーマは4つの村が集まって作る「博覧会」
2. 参加者は村ごとに分かれ制作を楽しみました
3. 自分が作った作品と欲しいアイテムを交換できます
4. 神山の自然素材を活かした作品たち
5. カミヤマート2013のポスター



2



3



4



What is Geibun?

□ 教員紹介 □ 授業紹介 □ カリキュラム紹介 □ 卒業生紹介 □ 就職情報 □ 入試情報 □ ゲイブ用語集

教員紹介

ごあいさつ

梶 義明 主任教授

進路を創るゲイブン

未来は過去の延長線上にあるものではありません。

新たな自分の未来を創る場所がここにあります。

学科の名前から想像できないアグレッシブな教育内容で構成されているのが芸術文化学科です。アート、デザインの最新の情報と、それを支える歴史と体験のスキル。覚えることに終始した減点主義に決別し、「創造性とマネジメント」という、これまでの価値観の次元を超える領域で、新たな自分を発見して下さい。同じような名前の学科はたくさんありますが、実は教育方針やカリキュラムの考え方はそれぞれに異なり、目指すところも違います。ゲイブンが考える全ての主体は「学生の進路」にあります。就職、進学に加えて、作家活動など一般大学には無い進路に進む人もたくさんいます。どのような教育的体験を経れば、このような多様な進路に対応できるのか、それを日夜考えています。そしてカリキュラムや授業形態の理想的でかつ現実的な変革を続けています。日本一の高さの山は？そうです富士山です。では、二番目に高い山を知っていますか？ほとんどの人が知りません。世界遺産に登録されメディアへの露出度も倍増するなかで、二番目の情報はありません。私たちは、この二番目三番目の情報が大切だと思っています。一番も大事にしながら、身近にあり毎日の生活に溶け込み、心や疲れた身体を本当に癒してくれる二番三番を発見する目を持ち、大事に育てていける人物を育てたいと考えています。絵が描けなくてもアートが好きなのはたくさんいます。デザインが形あるものだけでなく、形の無い領域にも広がっています。変革の時代の中で、あなたの未来につながる本当の興味を見つけれ来て下さい。待っています。

非常勤講師

石黒敦彦（アートセラピー）磯 達雄（メディア研究ⅡC）伊藤 剛（表象文化論Ⅲ_マンガ）伊藤里麻子（西洋美術史概説ⅠB / 表象文化論Ⅱ_越境する美術・音楽と舞台芸術へ）梅田亜由美（ミューゼオロジーと教育）榎本寿紀（芸術文化入門）大竹紀美代（造形総合・デザインⅡ_絵本表現）小川 希（文化社会論Ⅰ）長内研二（DTP デザインⅠA / ⅠB / DTP デザインⅢ / ヴィジュアル・コミュニケーションデザインⅡ C）小田嶋孝司（デザイン政策論）垣内恵美子（芸術文化政策特論Ⅰ 大学院）嘉藤笑子（アート・マネジメントⅠ）加藤庸子（アートセラピー）加島 卓（ヴィジュアル・コミュニケーションデザインⅠA / メディアと情報ⅡB）金子隆一（写真論Ⅰ / Ⅱ）河原啓子（芸術文化特論Ⅰ / ミューゼオロジーと運営）官浪辰夫（メディアプランニングD）工藤員功（造形民俗学Ⅰ / Ⅱ）倉林 靖（文化社会論Ⅱ）児島学敏（表象文化論Ⅵ_環境と建築）松浦 昇（メディアと情報ⅡA）沢山 遼（現代芸術論）申 明浩（表象文化論Ⅰ_絵本）鈴木紀慶（編集計画Ⅰ / Ⅱ）鈴木 勝（ヴィジュアル・コミュニケーションデザインⅠB）田中七星（ヴィジュアル・コミュニケーションデザインⅠC）田中真奈子（ミューゼオロジーと保存）千葉 慶（表象文化論ⅦⅡ_イメージとジェンダー）塚本文雄（プランニング概論）鶴岡明美（日本美術史概説ⅠB）中島 智（メディアプランニングB / メディア研究ⅡA / ミューゼオロジーと展示B）西中 賢（DTP デザインⅡ）花光里香（原書講読Ⅱ）林 浩平（芸術文化政策特論Ⅰ 大学院）堀井理子（メディア研究ⅡB）平野覚堂（映像Ⅱ）堀越洋一郎（資料情報処理）前沢明枝（原書講読Ⅰ）村田良二（メディアと情報ⅠA / ⅠB）森 啓輔（メディア研究Ⅰ / 情報処理Ⅰ / アーツプロジェクト）結城康太郎（絵画Ⅱ / Ⅲ / 造形総合・素描と油彩画の表現A）若山 滋（デザインマネジメントⅡ）渡邊敦彦（表象文化論Ⅳ_映画）



梶 義明 KAJI Yoshiaki

1950年 鳥取県生まれ
武蔵野美術大学造形学部産業デザイン学科卒業 1979年 同非常勤講師を経て、1996年武蔵野美術大学短期大学部空間演出デザイン専攻助教授、1999年武蔵野美術大学 芸術文化学科教授、2009年から向学科主任教授。1980年文化庁芸術家 国内研修員。現在、日本ビジュアルマーチャンダイジング協会副理事長。専門は、スペース及び展示デザインとビジュアルマーチャンダイジング研究。



是枝 開 KORE-EDA Hiraku

1960年 鹿児島県生まれ
コンピビア大学大学院芸術学部美術学科絵画・彫刻専攻修了 1991年～1999年セゾン美術館学芸員。1999年～2003年セゾン現代美術館学芸員。2003年～2014年神奈川県立近代美術館主任学芸員。2014年より現職。専門は、絵画および立体造形、造形演習、近・現代美術。



高島直之 TAKASHIMA Naoyuki

1951年 宮城県生まれ
武蔵野美術短期大学デザイン科卒業 1978年に週刊書評紙「日本読書新聞」編集部入社。学術書評欄を担当しながら美術・デザイン・写真・建築の記事を企画。同紙編集長を経て 1984年に退社ののち、美術批評（近現代美術 / デザイン史）に携わる。2004年より現職。1994、1995年ならびに 2001、2002年ギャラリーαMキュレーター。



新見 隆 NIMI Ryu

1958年 広島県生まれ
慶応義塾大学文学部フランス文学科卒業 1982年～1999年 2月、西武美術館・セゾン美術館の学芸員として、展覧会の企画を担当。1999年武蔵野美術大学芸術文化学科教授。イサム・ノグチ庭園美術館学芸顧問。慶応義塾大学アート・センター訪問所員。ギャラリー冊、アート・ビオトープ那須、顧問・キュレーター。2013年10月に2015年に開設する、大分県立美術館の初代館長に就任。



米徳信一 YONETOKU Shinichi

1964年 愛知県生まれ
武蔵野美術大学造形学部視覚伝達デザイン学科卒業 1990年武蔵野美術大学助手、1995年同非常勤講師を経て 1999年武蔵野美術大学 芸術文化学科助教授。2009年同学科教授就任。専門は、映像メディア。



杉浦幸子 SUGIURA Sachiko

1966年 東京都生まれ
お茶の水女子大学文教育学部哲学科美術史専攻卒業、ウェールズ大学大学院カレッジ校教育学部美術館教育専攻修了 2001年横浜トリエンナーレ 2001教育プログラム担当、2002～2004年森美術館パブリックプログラムキュレーター、2005～2011年京都造形芸術大学世界アーティストサミットコーディネーターを経て、2012年より現職。専門は、博物館学、美術館教育学、ミュージアムマネジメント。



客員教授 荒俣 宏 ARAMATA Hiroshi

1947年生まれ
慶応義塾大学法学部卒業 1970年日魯漁業入社 1979年日魯漁業退社 作家活動、研究活動に専心 1987年『帝都物語』（角川書店）が350万部のベストセラー、第8回日本SF大賞を受賞 1989年『世界大博物図鑑第2巻・魚類』（平凡社）でサントリ学芸賞を受賞 評論、小説、博物学研究、書物と挿絵研究、神秘学など領域を超えて活動。著書、訳書は約300冊に及ぶ。近著に「江戸の醍醐味」（光文社2008年）がある。



客員教授 林家たい平 HAYASHIYA Taihei

1964年生まれ
武蔵野美術大学造形学部卒 1988年林家こん平に入門 1993年NHK新人演芸コンクール 優秀賞受賞 / 北区若手落語家競演会 優勝 1994年につかん飛切落語会特別賞受賞 1998年につかん飛切落語会 奨励賞受賞（1999年同賞受賞） 1999年国立演芸場主催 花形落芸会 銀賞受賞 / さいたま芸術劇場主催 彩の国落語大賞受賞 2000年真打昇進。



客員教授 ナガオカケンメイ NAGAOKA Kenmei

1964年生まれ
1990年日本デザインセンター入社 1997年ドローイングアンドマニアル（現ディアンドパートナー株式会社）設立。2000年東京世田谷にD&DEPARTMENTをオープン。2009年デザイン視点の旅行誌「d design travel」を創刊。2013年渋谷ヒカリエに47都道府県の個性を発信するミュージアム、食卓、ストアを展開。主な著書に「ナガオカケンメイとニッポン」（創美社）「D&DEPARTMENTに学んだ、人が集まる伝える店の作り方」（美術出版社）など。



1. 一心に泥団子を作る徳島の子供たち
2. 大きなシートを広げて博覧会の準備中
3. 村ごとの特産品（作品）をアピールします
4. 作品を身につけ変身した参加者と学生

是枝…同じ場所、長く続けてきたから、見えてくるものがありますよね。参加した人たちからは、どんな反応がありますか？
米徳…カミヤマートの参加者は、来てくれた子どもたちと、神山町の実行委員の皆さん、そしてゲイブンの学生と僕たち教員。このメンバーが、年に一度、神山町で出会い、何かを作って、そして別れていく。リピーターしてくれる子どもたちもいれば、1回きりの子もいるし、学生たちも1年だけ関わ

は、僕らは作品作りの指導をしています。学生たちに大切にしたいのは、既成の考え方を溶かしていくような直感や体感なんです。神山の「行くところ」空気感、学生たちの表現にも影響を与えるでしょうね。

人が、自分が変わっていく

米徳…そうなんです。彼らに、なぜまた来たのか、その理由をはっきり言葉にしても、それは嬉しいことですね。

是枝…リビートしてくれる子どもたちがいるのは嬉しいことですね。

米徳…僕は僕も、カミヤマートをする中で変わっていったと思います。始めた頃は、学生にちゃんと勉強してもらわないと、と思っていた笑。でも、やっている中で、年々自分の気持ちも柔らかくなって、「まあ、

是枝…僕も別の4年間続けた卒業生と話したのですが、いろんな人と話をしながらモノを作ったことで、言葉と制作の関係について、より深く考えることができるようになったと言っていました。

米徳…実は僕も、カミヤマートをする中で変わっていったと思います。始めた頃は、学生にちゃんと勉強してもらわないと、と思っていた笑。でも、やっている中で、年々自分の気持ちも柔らかくなって、「まあ、

米徳…そうなんです。彼らに、なぜまた来たのか、その理由をはっきり言葉にしても、それは嬉しいことですね。

是枝…リビートしてくれる子どもたちがいるのは嬉しいことですね。

PROJECT PROFILE 2013

人数 / 11名 (1・4年生・大学院生対象)

形式 / アーツプロジェクト

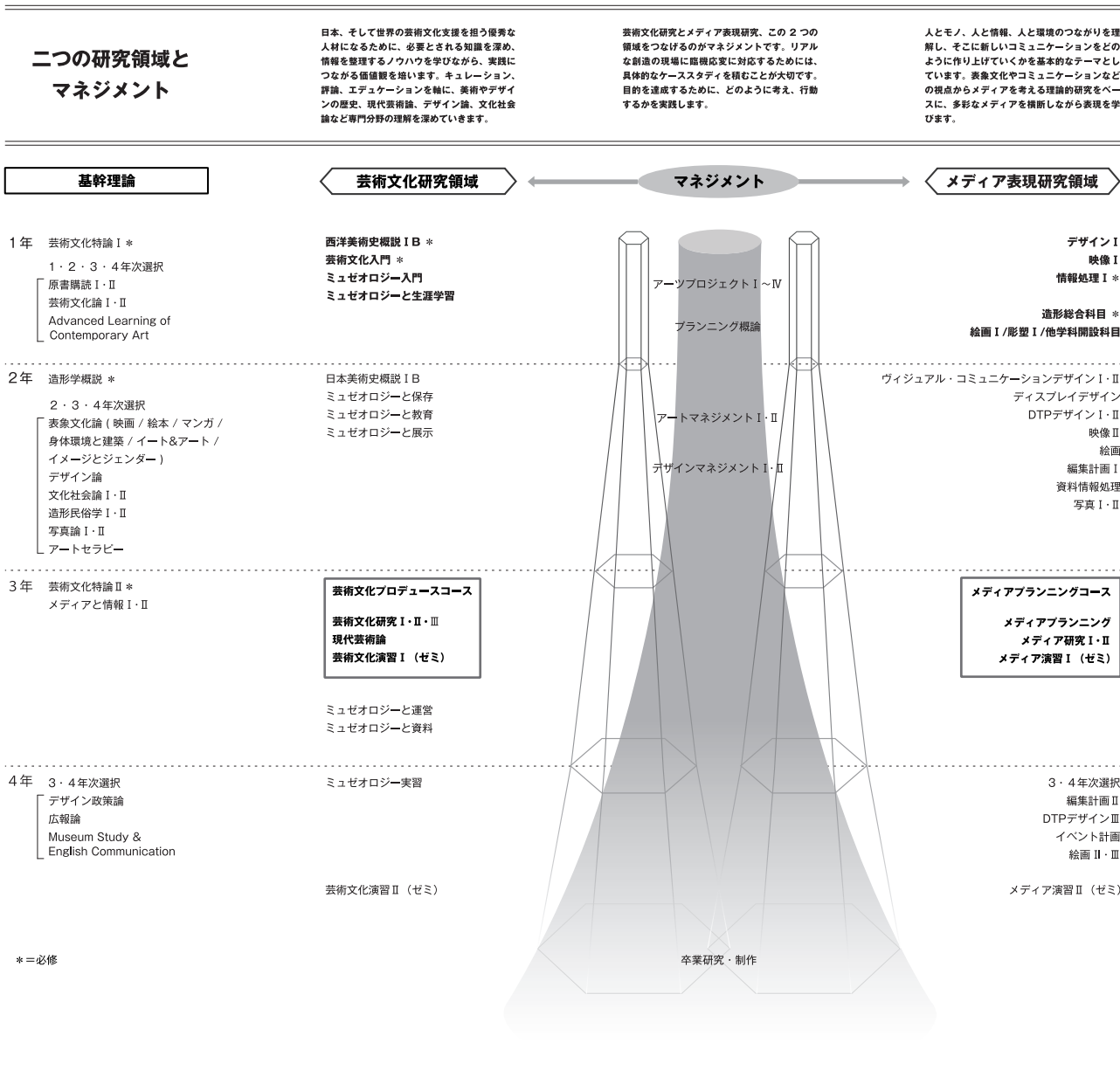
準備 / 3ヶ月
期間 / 3泊4日

分類 / ワークショップ企画

米徳…そして今年のカミヤマートは、新しい学生メンバーと是枝さんを迎えたわけですが、是枝さんが入ってくれて良かったと思うのは、自分から率先して、やりたいことをやってくれるところ。「マッサージオ絵かき」とか（笑）。

是枝…神山の大自然に入り、アートの触れて、凝り固まった心と体をほぐすっていう、まさにアートでマッサージオ（笑）。神山では、参加者と企画者、地元の人と東京の人、あるいは教える人と教わる人、っていう関係ではなくて、リラックスしてお互いに体と心を刺激し合う。そして何年か経って、その体験がふっと甦ってきて、それがその人にとって、胸に秘めた、大切にしたい何かになったらいいな、と思います。いやー、この夏が楽しみです（笑）。

☑ カリキュラム紹介



⑦ アーツプロジェクトとは | 関係力を実践で身につける、ゲイブンの特別授業

アート・デザインにおいて、〈ヒト〉〈モノ〉〈コト〉の関係をつくることを「マネジメント」と考えたとき、ゲイブンのカリキュラムでそれを最も象徴するのが、アーツプロジェクトです。このプロジェクト形式の授業は、ワークショップ、展示企画、イベント企画、パッケージデザインなど、学外機関と連携したカリキュラムが多く、学年を越えて集まった学生が積極的に企画・運営し、現場で活動することで、マネジメントの視点を培います。自分だけのシミュレーションに終わらず、学内だけでは得ることのできない実践を常にめざし、社会にアプローチしています。

<2014 年度活動中のプロジェクト> 地域デザイン・プロジェクトⅠ：立川駅南口地域のデザイン、地元産品のデザインに参加する、4 年ゼミで進めているプロジェクトと共同で進行。2：安曇野松川フォーラム－安曇野松川あぐり・アートプロジェクト〈食〉〈農〉〈生活〉〈景観〉をキーワードに、食と地域の記憶、農業とデザインについて考えます。松川村、安曇野ちひろ美術館、松本大学と協力し、2014 年第 1 回フォーラムと講座を開催します。第一パン キャラクターの SNS 活用プランニングプロジェクト／第一屋製パンのオリジナルキャラクター『ぶに丸』公式 Facebook、公式 twitter の活用方法を考案し、企業ブランド構築を実践します。アートサイト岩室温泉 2014 / 新潟県岩室温泉の地域活性化を目的にしたソーシャルデザインのイベント。地域の日常にアートを持ち込み、非日常体験とアートのもたらす高揚感が、地域の潜在的な魅力を引き出し、地域住民の連帯感を作り出すきっかけとする地域版芸術祭。3 月の実施期間は、現地泊り込み。巡回展「UMARTs2014 うまからうまれた15のアート」／昨年、馬の博物館で行った UMARTs2013 を、府中の競馬博物館に巡回し、子ども、親子を対象としたワークショップを実施。広報、ちらしなどのデザインワークも行います。「神山アートプロジェクト（Kamiyamart カミヤマート）」／徳島県神山町の実行委員会の方々と一緒に造形ワークショップを企画・運営するプロジェクト。神山の美しい自然の中で「美術する楽しさ」を味わいます。「府中市美術館リーフレット編集プロジェクト」／府中市美術館教育普及プログラムでの公開制作作家（福土朋子）紹介・解説用リーフレットの編集、デザイン。リーフレットは 11 月 8 日からの公開制作時に来場者に配布されます。府中の森芸術劇場デザインワーク／(1) 府中の森芸術劇場内の大空間に、府中市制 60 周年記念ディスプレイをデザインし、制作、設置、展示し、暮れには、それをクリスマスディスプレイに変貌させます。(2) 府中駅の中央に、記念モニュメントをデザインし設置します。書く塾＝Qプロジェクト／「書く」プロフェッショナルのための、実践講座。「書くプロ」は、文化芸術業界、最強のプロです。コピーライター、ジャーナリスト、評論家、小説家、あらゆるプロを凌駕すべく、キュレーターの筆力を伝授します。具体的には、展覧会をみるアートダイアリー、卒業生訪問インタビュー、体験した授業分析ブログなど。

<2013 年度実施したプロジェクト> 「南金津おらが芸品館プロジェクト」「安曇野松川絵本プロジェクト」「とちぎ蔵の街美術館ワークショッププロジェクト」「アートプログラム青梅 2013」「UMARTs2013 うまからうまれる 15 のアート展」

☑ 授業紹介



右：学生の作った俳句を 1 つ 1 つ短冊に書き、講評するたい平先生
左上：一番いいと思った句の下にキャンディを置いて投票
左下：ゲイブンはたくさんの妖怪がいます

👤 Pick up! 林家たい平 | 芸術文化論Ⅰ 笑いと五感で学ぶ芸術文化

火曜日 曜日の 1 限、普段は静かな 9 号館 515 教室から、にぎやかな笑い声が聞こえてくる。その中心にいるのが、日曜日の夕方「笑点」大喜利でおなじみの、落語家林家たい平さん。2010 年にゲイブンの客員教授に着任して以来、毎年、前期の朝一番、「芸術文化論Ⅰ」という授業を続けている。

初日、たい平さんは教室の電気を消し、窓を開けて授業を始める。「なるべく自然な状態で、僕の授業を受けてほしい。マイクを通してない、僕の生の声を、近くの人には大きく、遠くの人には小さく、聞いてほしい」と彼は学生に語りかける。人工的な教室の中で、できるだけ五感を開き、多くの学びの刺激を受けてほしいという、彼一流の気配りである。

授業カリキュラムのデザインもたい平流

だ。高座でお客さんを前にしているように、学生一人一人の様子を感じ取りながら、笑いを交え、当意即妙に学生の心のひだに入っていく導入部分。その後、ある日は、ゲゲの鬼太郎のテーマソングやマイケル・ジャクソンの「スリラー」を流しながら、一人一人の『芸文妖怪大図鑑』を作り、またある日は、教室を飛び出し、10 号館前の芝生の上に座って、俳句を詠んだり。そして、最後の授業では、身の回りの風景を一枚の写真で切り取り、そこに映る情景につけた新しい言葉をみんなで発表し合い、言葉のプロであるたい平さんの講評を聞いて、半期の授業が締めくくられる。

今年の授業を彼と一緒に作り上げているのは、ゲイブン 2-4 年生と、他学科の学生、聴講生を加えた、約 60 人。「なにげないようで、ためになると毎回感じる」、「言葉

をすごく大事にしているのが伝わる」、「時間が経つのが早い。もう終わっちゃうのかっていつも思う」。授業後に話を聞いた学生たちは、こう嬉しそうに語ってくれた。「表現は相手に伝わって、初めて表現となります。そのためには、まず自分をちゃんと好きになる、信じる必要があります。そのために自分に向き合う時間を持ってもらいたいと思い、毎回の授業を作っています」。このたい平さんの思いは、学生たちに伝わっているようだ。

耳を傾け、笑い、時にほろっとし、また笑い、最後にチャイムが鳴った時に「今日一日、頑張ろう」と思えるたい平さんの授業は、笑いと五感への刺激に満ちている。

林家たい平 → プロフィールは P9 記載



2008 年度修了

MORI Keisuke
森 啓輔

ヴァンジ彫刻庭園美術館 学芸員



2002 年度卒業

HARADA Kei
原田 圭

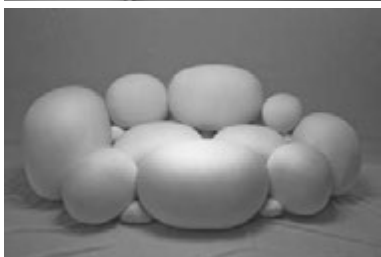
DO.DO、代表 / インテリア、プロダクトデザイナー



2003 年度卒業

TAKAHASHI Miwa
高橋実和

美術出版社、月刊『美術手帖』副編集長

上 / 「イクムタレイコ PLOON」(2014年4月20日～10月14日)
photo: Kei Okano 下 / 「ブルーノ・ムナリーのファンタジア
創造力ってなんだろう？」上 / Magic Carpet / Sofa / Concept CG
下 / Marshmallows / Sofa / photo by Kazutaka Fujimoto左 / 近年手がけた特集より、2013 年 6 月号「初音ミク」
右 / 創刊 1000 号の 2014 年 3 月号「アンディ・ウォーホル」

2007 年度卒業

INABA Yumi
稲葉裕美

株式会社 OFFICE HALO 代表取締役

上 / 現在準備をしているアートスポットを巡る旅企画のテスト
ツアーの様子 下 / 旅企画スタートに向けてのミーティング風景

2004 年度卒業

ASHIDA Sayaka
芦立さやか

撮影：表恒匡

東山 アーティスト・プレイズメント・サービス (HAPS)
ディレクター上 / HAPS オフィス外観（築 100 年の町家をワークショップ
で改修し使用）下 / キュレーター招聘事業

学芸員という仕事は、展覧会の企画・運営に限らず、ワークショップやレクチャーなどの教育普及活動、作品管理、広報としてのメディア対応など、業務が多岐にわたります。多様な業務を並行して行うセルフマネジメントの能力は、学芸員において必須です。ですがそのような職能は、現代ではどの業種でも求められる傾向にあるでしょう。その点で、芸術文化学科での授業が、美術とデザインの広範な領域を視野に入れ、実践に即した複合的なプログラムで行われているながらも、より深く専門分野を研究できる環境が整っていたことが、私にとって何より魅力的でした。現代アートと呼ばれる分野は、ともに時代を形作る美術作家との展覧会という表象を通して「今」を視覚化する共同作業です。美術史を学びながら、現代社会を取り巻く状況に鋭く切り込む「メディア研究」や「現代芸術論」といった理論科目は、社会をみつめる自身の眼を確実に養ってくれました。

現在、僕はデザイナーとして活動していますが、4 年生になるまで、学芸員になることを目指していました。「展覧会をつくりたい。生涯の仕事として、アートとデザインを追求していきたい」という思いでしたが、“作り手の側で考える”という、ゲイブンの独自のカリキュラムの下、創作する側に行っても良い状況があったので、「いつか、自分の仕事をまとめた、自分の展覧会をつくりたい」という思いに変わり、デザイナーの道を選びました。そこに至ったのは、学外の活動を積極的に行う学科の方針が、影響していたと思います。銀座のウィンドウディスプレイの仕事が特に印象深く、学生でありながら、そういった場を提供してもらい、自分が作ったもので、街を歩く人が足を止めて喜ぶ姿に、とても感動しました。その経験が、今の仕事に繋がっています。多角的な視点が必要とされるデザイナーという職業において、学問と創作を同時に学べる、芸術文化学科は、最良の選択だったと思っています。

「これからいろんな仕事に就くと思うけれど、みんな優秀な編集者になってくれ。編集者っていうのは本や雑誌だけじゃない、この世界を編む人ってことだ」。新見隆先生がそんなふうに講義で話してくれたのは 3 年生のとき。この一言で、美術に携わるどんな仕事をするか、当時職種を前提にぼんやりと考えていた頭が整理されました。何の仕事に就くかではなくて、自分と社会との関係に焦点を合わせて働くこと＝生きることが大切なのだと教えられました。私の仕事は現代美術を主に扱う雑誌の編集者です。編集と聞いたときに、多くの人が思い浮かべる仕事です。でも一度も「雑誌の」編集者だと考えたことはありません。『美術手帖』を軸に、ウェブもやりたいし、展覧会やイベントも企画したい。編集して世の中に提示する方法は雑誌のほかにもたくさんあります。まだ道なかば。一人前の編集者になるべく、修行の日々です。

芸術文化と社会の橋渡しをする仕事がしたいと思い、芸術文化学科を受験しました。そして今年、かねてから計画していた芸術文化メディアをつくるため起業しました。アートスポットや芸術文化を巡る旅の企画を考えていて、そのスタートに向け準備を進めています。ゲイブンではアート、デザイン、芸術文化全般に関する知識や理解を深め、自分の考えやプランを実際にかたちにしていくための手と頭の基礎を学ばせてもらったと思っています。今、抱えている様々な課題に向き合う時に、頭と手の両方を使いながら時にロジカルに、時にクリエイティブに発想していけるのはゲイブンでその両方を育ててもらったからだだと実感します。芸術文化と社会との繋がりをつくる仕事は、まだまだ新しい担い手が期待されている活躍のチャンスでもあります。新しい時代を切り開いていく夢を持った仲間が、どんどん増えてくれればと願っています。

私が在学していた 2001年から 2005年は、横浜トリエンナーレが始まり、森美術館が開館するなど現代美術シーンが新しいフェーズを迎える時でした。作家志望でもなく、研究者肌でもなかった私は、一体自分に何ができるのかと悩んでいたように記憶しています。転機となったのは、1 年生の時に募集があった「art-Link 上野一谷中」という、町中で展示を行うアートプロジェクトに参加したことでした。以後、ギャラリーでインターンを始め、アート・マネジメントの世界に足を踏み入れていく中で、ゲイブンでの授業が活かされました。卒業後、横浜の「BankART1929」での勤務を経て、様々なアートプロジェクトに関わってきました。これまでの経験の中で、恒常的にアーティストを支援できるシステムが必要と考えた結果、現在の場づくりの支援事業に関わることに至りました。この仕事をしていて一番重要なのは、国内外のネットワークを持つことです。現在、ゲイブンの卒業生は各地で活躍しており、そのネットワークは大きな糧となっています。

卒業生紹介

GRADUATE PROFILE



ゲイブンの卒業生は、さまざまな業界や職種で活躍しています。ここではそんな先輩たちの学生時代の経験や現在の仕事についてご紹介します。

入試情報

Geibunで学ぼう！

小学校の時は図工が好きだった、美術に魅力を感じるけど一歩踏み出せない、見ることは好きだけど作る自信がない、漠然とだけ美術に関わりたい、とにかく何でもやってみたい、などなど、今、あなたに少しでも美術や表現への関心があるなら、可能性は無限にあるとゲイブンは考えます。作品を作る喜びを感じ、表現について語り合い、そして人と作品と場所をつなぎ、社会に発信する。そんなクリエイティブな世界を実現していく人を育てるのがゲイブんです。画がうまく描けたり、特別な才能がないとダメなんじゃないかと、美大で学ぶことをあきらめてしまうのはもったいないことです。誰の中にも表現する力があります。「一からゲイブんで学んでみたい！」そんな意志のある皆さんの可能性を見つけるために、ゲイブンは 4 つの試験方式を用意しています。

公募制推薦方式・・・15 名（一般型 12 名＋英語力重視型 3 名）

高校生活の間に、皆さんが学内・学外で取り組んできたことを評価する方式です。「一般方式」のような基礎学力を測る試験はありませんが、「学校長推薦方式」を採用し、卒業年次や評定平均値に指定があります。「公募制推薦方式」には「一般型」と「英語力重視型」の 2 つのタイプがあります。「一般型」は、小論文とグループディスカッション、その後にプレゼンテーションを行ないます。発想力と論理的な思考、そしてコミュニケーション力をみせてもらいます。「英語力重視型」は、その名の通り、英語力に自信のある人にぜひ挑戦してほしい試験です。日本語による小論文と英語による面接を行ないます。なお、「公募制推薦方式」で受験する人は、ゲイブンの教員に事前相談ができます。相談内容を電子メール (geibun@musabi.ac.jp) で送ってください。また、オープンキャンパスでも事前面談を行ないます（8 月 16・17 日。要予約）。分らないこと、不安なことがあったら、ぜひ直接質問しに来てください。

一般方式・・・40 名

基本的な語学力を重視しながら、得意な専門分野を選ぶ方式です。ムサビ独自の共通試験である国語・英語と、ゲイブンの専門試験を受験してください。専門試験は〈小論文〉〈造形表現〉〈鉛筆デッサン〉〈数学〉の 4 つから 1 つを選択します。デッサン等の造形的な能力を持つ人、文章能力に長けた人、論理的な思考力を持つ人など、自分の得意な分野を活かしてチャレンジしてください。

大学入試センター A 方式・・・10 名（平成 27 年度入試より新しく導入します）

大学入試センター試験とゲイブンの専門試験を組み合わせる方式です。大学入試センター試験は、6 教科 29 科目から自分の得意とする 2 教科 2 科目を選択します。また、指定した選択教科・科目を 2 教科 2 科目以上を受験した場合は、得点の高い教科・科目の点数で評価します。ゲイブンの専門試験は〈小論文〉〈造形表現〉〈鉛筆デッサン〉の 3 つから 1 つを選択します。この方式は「一般方式」と併願することが可能です。（ただし「一般方式」で専門科目〈数学〉を選択した場合は除きます）

大学入試センター B 方式・・・15 名

専門試験を行わず、高校までの学びを教科だけで評価する方式です。大学入試センター試験の教科・科目の中から、ゲイブンが指定した教科・科目のみで受験できます。専門的に美術やデザインの教育を受けていなくても、これからの学びを美大で見つけたいと考えている人は、ぜひこの方式でチャレンジしてください。この方式は、「一般方式」および「大学入試センター A 方式」と併願することが可能です。

* 全ての試験の詳細は、武蔵野美術大学 2015 年度入学試験ガイドをご覧ください。

就職情報

就職・進路について



大学に入学して勉強するのは、その先にある「社会で働く」ために必要な専門的「ちから」を身に付け、そのちからを円滑に機能的に有効に使うための知識を蓄えるのが目的です。

芸術文化学科に入学してくる新入生全員に、まず最初に教授が問いかける言葉があります。「プロフェッショナルになりたいかッ！」それに新入生たちが答えます。「はい！になりたいです！」

ここからスタートする芸術文化学科のカリキュラムには、すでに伝えられているような体験型の授業が多くあり、働くことを前提とした社会性のある強い力の育成に全てが注がれます。楽しくクリエイティブに、学ぶ意味を実感しながらの貴重な体験です。卒業生の進路は、美術館や博物館の学芸員はもとより、企業の企画部門、広告、

編集出版、グラフィックデザイン、空間デザイン、ウェブデザイン、ゲームデザイン、映像、教員、公務員など多岐にわたります。一つの学科で多くの進路に通用する教育内容を持つのも芸術文化学科の特徴的な点です。絵やマンガが好きな人も、文章が好きな人も、話が好きな人も、食べるのが好きな人も、アートやデザインという関係性によって、学ぶことと働くことが連なって生まれて来て、進路が見えてきます。一方で、作家や自立指向の人もありますから、全体から見た企業への就職率は自然と穏やかになりませんが、それぞれが目的をもって力強く社会貢献していることに変わりはありません。社会からの要請がますます多くなるジャンルと言えます。



Geibun 就職実績一覧

美術館・博物館のキュレーター（学芸員）、政府や自治体の文化行政、企業・組織の企画、商品開発、広報、プランナー、編集者、デザイナーや教員など、ゲイブンの卒業生はさまざまなジャンルで活躍しています。

■美術館／博物館／図書館／劇場／ギャラリー

世田谷美術館 / 長野県信濃美術館 / 箱根ラリック美術館 / 武蔵野市吉祥寺美術館 / 森美術館 / 東京都庭園美術館 / 東京都現代美術館図書室 / ワタリウム美術館 / 松下ナイスミュージアム / 丸沼弦術の森 / 東京アートミュージアム / タカ・インギャラリー / BankART1929 / SHUGO ARTS / 方画 / アクシスギャラリー / 東京国立近代美術館フィルムセンター / 東京ワンダーサイト本郷 / ネパランド絵本美術館（韓国）/ TARO NASU / クムサンギャラリー / 東京二期リゾート / 世田谷パブリックシアター / 劇団四季 / ちきぎ蔵の街美術館 / 森アートセンター / 大分県立美術館推進局 / 青森県立美術館 / 川崎市民ミュージアム / ヴァンジ彫刻庭園美術館 / 神戸ファッション美術館 / 俳優座劇場 / 中村キース・ヘリング美術館 / 京都国際マンガミュージアム / 朝倉彫塑館 / 国立新美術館 / 神戸市立小磯良平記念美術館 / 鎌倉市鶴木清方記念美術館 / 世田谷文学館 / 佐倉市立美術館 / 女子美術大学美術館 / 長野県信濃美術館・東山魁夷館 / 何必館・京都現代美術館 / マキ・ファイン・アーツ

■公共団体／非営利団体

経済産業省貿易経済協力局 / 調布市文化コミュニティ振興財団 / としま未来文化財団 / 日本タイポグラフィ協会事務局 / 松本市役所 / 富山県庁生活文化課 / 江東区文化センター / 秋田県湯沢市役所 / 東村山市役所 / 豊島区役所 / 豊橋文化振興財団 / 前島アートセンター / 静岡県教育委員会 / 子ども応援ネットワーク / なかよし会 / 野田市野田公民館 樟のホール / 佐倉市民音楽ホール / せたがや文化財団 / 茨城県常総市役所 / 東山アーティスト・プレシメント・サービス (HAPS)

■教育／文化

ブレスキット / タイ・バンコク日本人学校 / ねむの木学園 / 専念寺第二若草幼稚園 / やまびこ保育園 / 芸術による教育の会 / 日本公文教育研究会 / 武蔵野美術大学助手 / 武蔵野美術大学大学史料室 / 東京都教員 / キープ伊那 こどもの森 / 日本外国語専門学校 / 松本芸術学院 / 石井兄弟社 / バンコク日本人学校 / 東京都立工芸高校 / 明星高校 / ドルトンスクール名古屋 / 青山環境デザイン研究所 / 遊美堂 / TOKYO AFTERSHOP / 栄光 / アトリエ・エビス

■広告（代理店）／CM 制作

電通 / 博報堂 / 東北新社 / 日本経済社 / マッキンゼー エリクソン / ビーエーシー / J・ウォルト・トンプソン / 新潟デザインセンター / 博報堂プロダクツ / アーツ / 進研アド / アディックス / アイク広告 / オプト / ウッドオフィス

■デザインプロダクション

マッチ&カンパニー / デザインアソシエイツ / DATCorporation / Design Spirits / ケイ・ケイ・インターナショナル / ティーエーイー企画 / タートルファクトリー / アレフ・ゼロ / ASK PLANNING CENTER / デザインスキーマ /

デザインデパート東京 9392 / 長内デザイン室

■プロダクトデザイン

ヨシモト工房 / サカモト / メディコム / クリエイティブヨコ / マドラス

■空間デザイン／店舗設計／建設

丹青社 / ノムラデュオ / エイムクリエイツ / オフィス設計 / リード エグジビション ジャパン / エクスステージ / 白水社 / 生活科学運送 / レインボー造形企画 / ハウジングエージェンシー / 未来図コーポレーション / ライトシーン

■印刷／写真

大日本印刷 / 東京美術印刷 / 竹尾 / スタジオ青山 / カラーテック / 東京スタジオ / 小林クリエイト / 光陽社 / 橋本 / SIC / アマナ / ナー印刷工業株式会社

■新聞／出版／編集

美術出版社 / 講談社 / 淡文社 / 樞出版社 / 東京書籍 / 恵雅堂出版 / 今人舎 / 紀伊国屋書店 / 思文閣グループ / フチグラパブリッシング / メディカルレビュー社 / 学書 / 経緯大入 / エルミナダム / アクセア / オビカ / バブーン / 緑書房

■映像・ゲーム・アニメーション

スタジオジブリ / 角川映画 / バンダイ / セガ / studio 4℃ / コナミデジタルエンタテインメント / スタジオ びえろ / マッドハウス / ワンズワン / ゲームボット / GONZO / ダンスノットアウト / エフ・アンド・エフ / ネクストワン / ビー・ブレーション / production I.G / CBC クリエイション / メディア・ワン / 葵プロモーション / プレミアムエージェンシー / アニメイトグループ / グッドスマイルカンパニー / タイトー / ガイナックス

■情報／通信／ネットワーク

日本 IBM / 日本電気 / DeNA / ヤフー株式会社 / 楽天 / DNP デジタルコム / 東京海上日動システムズ / ソネットエンタテインメント / マッキーソフト / ソフトバンクメディアアンドマーケティング / ジャパン・デザイン・ネット / リクルートメディアコミュニケーションズ / コスモコミュニケーションズ / DNP メディアクリエイト / ボニーキャニオン / 日立製作所 / オウケイウェイブ / エルコ / グラスホッパーマニアファクチュア / DYM / ドワンゴコンテンツ

■企画／プロデュース／コンサルティング

NHK プロモーション / TOWI / インプレスホールディングス / フレックス・デザインパワーズ / パシフィック・ディベロップメントアンドマネジメント / パソナグループ / ジャパンライフデザインシステムズ / NEC デザイン & プロモーション / DNP デジタルコム

■電機／機械

キャノンマーケティングジャパン / ソニー / ソニーコンピュータエンタテインメント / 富士通オフィス機器 / 三洋電機ロジスティックス / 横河電機 / 理想科学工業 / 愛知時計電機 / エスケージャパングループ / フェローズ / 親和産業

■サービス／アミューズメント

近畿日本ツーリスト / 播磨ジャパン情報サービス / オリエンタルランド / 帝國ホテル / グッドウィル / リビエラ東京 / クレディセゾン / 伊勢丹 / 丸井 / 藤田観光 / 東京葬祭 / 日比谷花壇 / 千趣会 / ヘルクルーズ / 能美防災 / 文教センター / ルミネ / イオンモール

■食品／外食／医薬品／化粧品

日本マクドナルド / 伊那食品工業 / 松屋フーズ / 大庄 / すかいらく / サンクセール / ファンケル / コーセー / デリシャスリンク / 日本レストランエンタープライズ / チロルチョコ / ハーバー研究所 / アンデルセン / 一家ダイニングプロジェクト / タノイ酢

■小売

タカラ / ビックカメラ / ノジマ / 東急ハンズ / 世界堂 / 山野楽器 / メガネスバー / 橋本コーポレーション / 錦商事 / 阪急リテールズ / 第一屋製パン / ヨドバシカメラ / ロフト

■服飾／繊維

ヨーガンレール / ワイズ / トゥモローランド / ヨウジャマモト / ユナイテッドアローズ / 幸効呼 / アーバンリサーチ / ファーストリテイリング / ワールド / キタム / 京都きもの友禅 / ニュコロ / メンズビギ / 三陽商会 / 助野靴下 / プーフーウー

■進学／留学

武蔵野美術大学大学院芸術文化政策コース / 武蔵野美術大学大学院造形学コース / 武蔵野美術大学大学院美術理論・造形学コース / 東京芸術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻 / 筑波大学大学院博士課程 / 東京学芸大学大学院 / 早稲田大学大学院 / 立教大学大学院 / 日本女子大学大学院 / 多摩美術大学大学院 / 東京芸術大学大学院 映像研究科メディア映像専攻 / 金沢美術工芸大学大学院 / バリ第一大学大学院 (仏) / ノッティンガムトロント大学 (英) / INSTITUTO EUROPEO / プルゴニニ大学 (仏) / セントラルセントマーチン大学 (英) / Pratt Institute (米) / 東京芸術大学大学院音楽研究科音楽文化創造専攻 / 早稲田大学大学院国際情報通信研究科 / 横浜国立大学大学院都市イノベーション学府 / 立教大学大学院現代心理科学研究科 / 早稲田大学大学院公共経営研究科 / 筑波大学大学院人間総合科学研究科 / 東京大学大学院情報学環・学際情報学府 / 一橋大学大学院言語社会研究科 / 埼玉大学大学院

プロジェクトフロー

1

ヒアリング→デザイン

劇場のイメージを膨らませるために、まずは様々な人の意見を聞きます。「ストーリー性」があるテーマにするため、モチーフは『くるみ割り人形』に登場するバレリーナに決定！

2

プレゼンテーション

テーマ、デザインスケッチ、完成予想図、材料、設置方法などを、劇場の方に伝えます。実現化に向け、劇場の方のアドバイスも参考に！

3

いざ、制作！

PC 作業はもちろん、色々な素材に触れて加工しながら立体物の制作に取り組みます。試行錯誤を繰り返して、イメージをカタチにします。

4

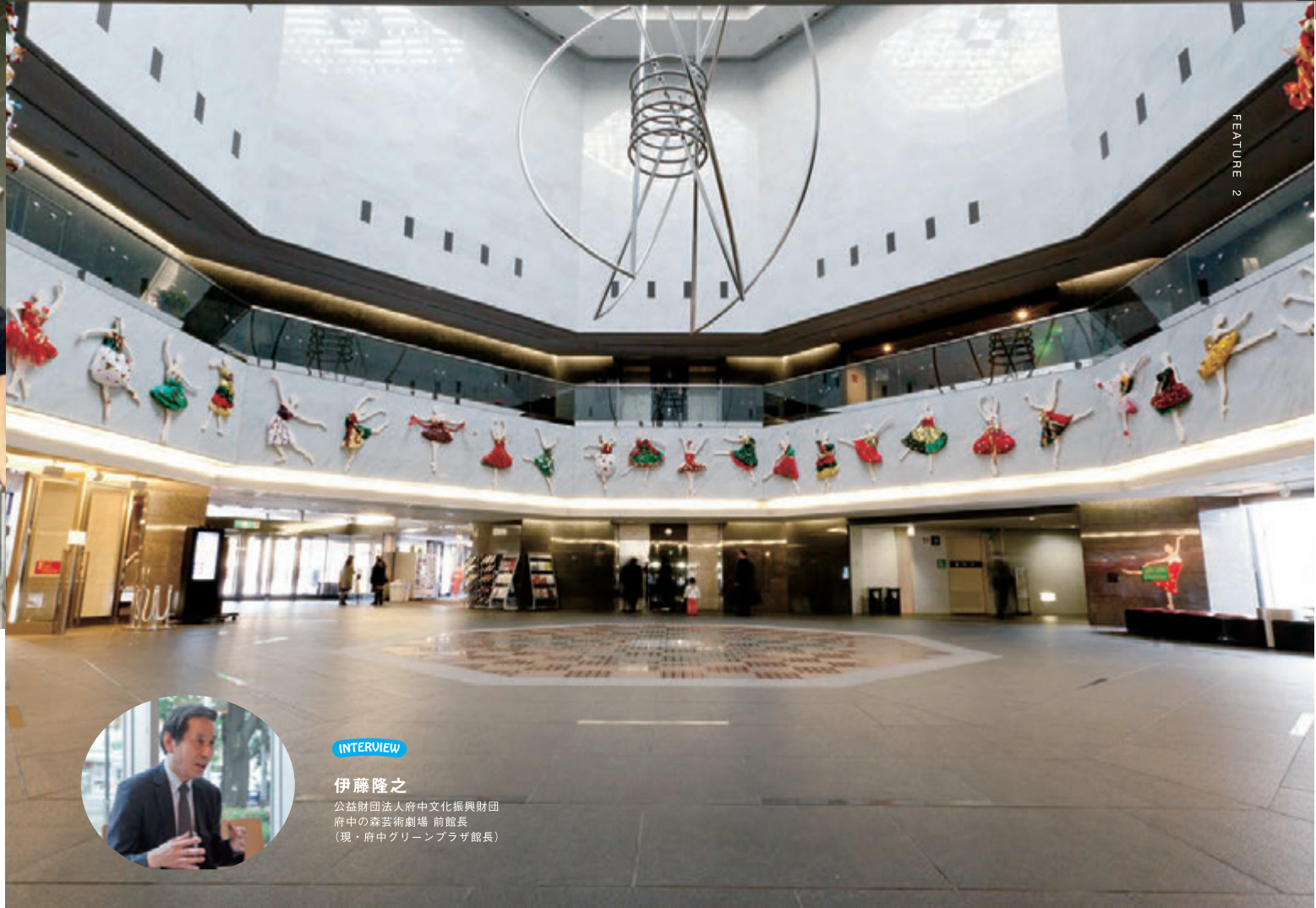
施工・設置

全長 50 数 m もある劇場の円形壁面に、クリスマス衣装を着た等身大バレリーナが 38 体出現！現場では全体のバランスを見ながら設置します。

5

完成！！

「エントランスを舞うバレリーナ」の群舞！！華やかでわくわくするデザインで、来館者をおもてなし。多くの人の笑顔と歓声と共に、劇場のクリスマスを演出。



INTERVIEW

伊藤 隆之

公益財団法人府中文化振興財団
府中の森芸術劇場 前館長
(現、府中グリーンプラザ館長)

社会で通用する力の発見

輯 義明

「自分を最も知らないのが自分」と言われるように、何をすれば社会で生きていけるのかが分からない、自分とどんな力があるのかが自覚出来ていないという状況は、新入生に多くあることです。教室での講義ではなかなか自発的な自我の自覚は芽生えにくいものです。芸術文化学科にアーツプロジェクトという学外の組織と共同して研究に取り組む授業が多くあるのは、正に「自分の可能性の発見」を、体験を通すことで実現しようという目的のためです。

その中でも府中の森芸術劇場のプロジェクトは、かなりの部分でプロフェッショナルの仕事に隣接する規模とクオリティーが要求される点で、およそ学生が取り組むには常識はずれのものだと言えます。それが学科創設以来、十数年継続して実現しているのは、劇場サイドの寛容と、期待に応え続けているゲイブンの学生たちの熱意と創意工夫と努力の結果です。

せん。それらの知識を急ぎ吸収しつつ、表現のためのコンピュータスキルやアイデア考案、素材加工、設置方法、安全管理、更には予算との兼ね合いなど、矢継ぎ早に解決を迫られる事態が生じます。情熱のある若さというものは、時として驚きの結果を生み出します。毎年、多くの困難を乗り越えて、学生たちの知恵と努力と学年を超えた協力体制で、信じられない感動の光景を劇場空間に生み出してきてくれました。

市民の皆さんや劇場に来館されるお客様の期待を集めていることに加え、一昨年から、学生たちのデザインがきっかけで、同劇場で公演される松山バレエ団の皆さんとの深い交流も生まれました。ここで体験的に学んだ学生たちは、

自分の長所、あるいは足りないところを自覚し、以後それを伸ばしたり強化すべく勉強したりして、社会で通用する本当の力を身に付けていきます。

PROJECT PROFILE 2013

- 人数 / 15 名 (1-4 年生対象)
- 形式 / アーツプロジェクト
- 期間 / 4 ヶ月
- 分類 / デザイン

Teacher

輯 義明

01 府中の森芸術劇場 デザインワーク

お客様を温かく迎えるためのデザイン
現場で育まれる「プレゼンテーション力」

10 年以上にわたって、府中の森芸術劇場とゲイブンの学生が一緒に取り組んできた「府中の森芸術劇場デザインワーク」。劇場のメインエントランスに飾られる巨大なクリスマスディスプレイの企画を、ゲイブんに提案してくださった、前館長の伊藤隆之さんに、プロジェクトを振り返っていただきました。

お客様へのおもてなしデザイン

オーケストラ、古典芸能、バレエ、様々なジャンルの催しを行う劇場へ足を運ぶお客様にとって、自宅を出てから帰宅するまでが鑑賞時間です。劇場までの道のりをわくわくしたり、開演までの時間食事やお茶をしたり、プログラムを見たり。そうした時間を楽しみながら公演への期待感を高め、終演後は、余韻を楽しみながら、自宅まで帰られる。前後の時間も含めて、お客様をお迎えし、楽しんでいただく空間を演出する必要があるのではないかと考えていました。また、

エントランスを含め当劇場の内装は、石張りを用いているため、温かみを加えたいと言う気持ちもあり、ゲイブんとのコラボレーションが始まりました。

エントランスに入って、ディスプレイを見上げたお客様は歓声をあげます。その声を聞いただけでもお客様がどれだけ感激しているか伝わってきます。ディスプレイの背に、記念写真を撮るご家族も多いです。写真を撮る理由、それは来館した記念や家族との思い出を残したいという気持ちの表れだと思のです。ゲイブンの学生たちが作ったディスプレイがあることで、お客様が劇場を身近に感じ、ファンが増えいく、担当者としてこんなに嬉しいことはありません。

現場で身に付ける

「プレゼンテーション力」

学外でプレゼンテーションをする機会はあまり多くないと思いますが、ゲイブン生たちは毎年、コンセプトから話し合い、一生懸命発表してく

れています。連携が始まった頃は、プレゼンテーションが十分でないかなと感じたこともありましたが、年を重ねるごとに、その力が上がってきていると感じています。

常に気にかけているのは、作業の現場で問題点を指摘するのではなく、プレゼンテーションの段階でしっかりと議論することです。お客様に安全に劇場のメインエントランスを楽しんでもらいたいという思いもさることながら、プレゼンテーションの段階でたくさん悩んでもらった方が、学生たちにとっても勉強になると思います。

毎年、どんなディスプレイがお客様に披露されるのか、劇場側も楽しみにしています。年ごとにチームの個性とチームワークが異なるので、表現の仕方がまったく違うこともあります。一番大切なのはお客様の安全なので、そこだけはきちんと守ってもらっていますが、先生のご指導があるので、出来上がりを心配したことはありません。劇場側から安全性や取付方法について学生に疑問をぶつけ、彼らの答えを聞く。そこで納得する答えが得られれば安心だと判断しています。音楽や演劇の要素が強い劇場と、美術大学が関わることは珍しいことかもしれません。しかし、劇場もアートを表現する場で、美術に興味のあるお客様もいっぱいいます。美術大学と連携して、劇場という芸術空間を演出する。とても可能性がある取り組みだと感じています。

Teacher
今井良朗

02

ちひろ美術館との
コラボレーション
思いを共有することから生まれた
2つの美術館インターンシップ

インターンシップから地域や社会へのひろがりを

学芸員になるために博物館での実習が義務づけられていますが、限られた期間に大勢の学生と一緒に実習をするのでは、普段、美術館で行われている仕事はなかなか見えてきません。でも、美術館の学芸員が実際どんな仕事をしているのか、見てみたいですね。そこでゲイブンは、いくつかの美術館と提携して、ゲイブン独自の美術館インターンシップを行っています。その一つが、長野県安曇野と東京都練馬区にある「ちひろ美術館」です。

ちひろ美術館は、絵本作家いわさきちひろさんの作品や、世界33カ国204名もの絵本作家が生み出した3万点近い絵本原画を所蔵する、世界でも最大規模の絵本の美術館です。開館当初から、「展示だけではなく、教育普及活動や地域連携を進め、地元中学校や住民との催しも積極的にを行っています。ゲイブンとは同じ時に生まれた安曇野ちひろ美術館。地域に根ざした芸術文化を育みたいという両者の思いが重なり、2002年、安曇野ちひろ美術館でのインターンシップがスタートしました。

業務だけでなく、ワークショップの手伝い、ギャラリ、ショップ、カフェでの接客などすべての業務に関わりまします。それがこの美術館の特徴であり、美術館を運営する全ての現場に立ち会える経験は、学生にとって貴重な財産となっています。2013年からは、ちひろ美術館・東京でのインターンシップも始まりました。この館は、ムサビからも近く、一年を通して、より多様な関わり合いができると期待しています。これも、安曇野ちひろ美術館と十年以上育んできた信頼関係があったからです。また、安曇野の松川村との交流も深まり、武蔵野美術大学産官学共同プロジェクトの一環として、学生を中心に、昭和30年代の行事や行事食を次世代に伝える絵本『とんすけとこめたろう』を2年がかりで制作し、今年1月に完成しました。ゲイブンが目指している「インターンシップから地域や社会へのひろがり」。これからさらに広げていきたいと考えています。



ちひろ美術館・東京 インターン / 4年 矢津田 毅海

私は、7月と8月にワークショップスタッフをメインとしてちひろ美術館・東京にお世話になりました。いわさきちひろが生前過ごした場所に建つ美術館は、ちひろをはじめ他の作家たちの作品、絵本、庭の花にあふれ包みこむような穏やかな空気が流れていました。美術館内では、朝礼、打合せ、会場設営、実施、撤収、反省会と次回打ち合わせを一日の主な流れとして動いています。それ以外には、レポートと美術館ブログの原稿作成、新たな企画提案が課題としてありました。

私が参加したワークショップは、
・水彩技法体験ワークショップ「朝顔を描こう」
・針金造形ワークショップ「特大クワガタを針金で作ろう」
・ちひろの水彩技法体験ワークショップ「にじみでうちわをつくろう」
の3種類です。子どものみでの参加が多かったり、家族連れ中心の日があったり、年齢層の高い方々が普段よりいらしていたりと、内容によって参加者と私たちスタッフとの関わり方も常に変化していたのがおもしろく、印象に残っています。

子ども、大人、様々な人々それぞれが暮らす日々のなかで、ちひろ美術館・東京という場所でひとつの発想をふくらませた場面に、間近で関わることでできたインターンシップでした。



良い経験になりました！

安曇野ちひろ美術館 インターン / 4年 芦川 里奈

安曇野ちひろ美術館では主に、美術館の教育普及の活動の核となる、地元の松川村立松川中学校の中学生ボランティアによるワークショップのスタッフとして働かせていただきました。

夏のワークショップは、美術館の特性を生かした、ちひろの水彩技法を体験できるものと世界の絵本画家の作品にちなんだものが行われました。そこでは中学生ボランティアが、お客様にワークショップの説明と対応を行います。私はそこにスタッフとして入り、お客様と中学生への二重のサポートを行いました。この活動で特に印象に残ったのは、中学生ボランティアの姿です。私は、夏の観光客で賑わう美術館で、めまぐるしくも一生懸命にお客様と接する中学生と3週間弱過ごしました。毎日かわるがわる様々な中学生と過ごしましたが、驚くほどの成長や活躍ぶりをみせてくれた生徒がたくさんいて、逆に私の方が学ぶことが多かったように思います。

このインターンシップで、地域の人々に寄り添い、地域に根付く美術館のあり方について改めて深く考えさせられました。また、美術館における学びの可能性を、肌で感じられたとても貴重な体験になりました。

中学生には驚きました！

デザインの視点から
絵本を読みとく

NAME

今井良朗

絵本の独特の表現は、言葉とイメージの相互作用から生まれる。

絵本はやさしい？

絵本には、子どもの本、絵の入ったわかりやすい本といった固定観念があります。では、絵本の絵と絵画や版画は何が違うのでしょうか？ 絵本の物語と文学はどう違うのでしょうか？ 大きな違いはありませんが、絵本は複数の絵で構成されています。複数の絵による連続した構成は、映画やマンガとも似ています。また、絵本の物語は絵があるために文章が簡潔です。小説や詩と同じ形で、声を出して読むと、そこに音のリズムや想像の世界がひろがります。絵本は本ですからデザインが必要です。絵本は、文学、美術、デザイン、音楽、映画、演劇ともつながっています。決してやさしい絵物語ではありません。簡潔な表現には、見えない奥深い世界を含んでいます。読み込んでいくと、さまざまな発見と驚きがあります。

言葉とイメージによる独特の表現

絵本は表現の対象としても、研究の対象としても、もっと注目されていいはずですが、日本では、児童文学から研究されることが多く、視覚表現からのアプローチがありません。文学と美術が重なりあった絵本は独特の表現形態です。言葉と映像やイラストレーションなどのイメージを分けるのではなく、相互に関係していること、全体を総合的に考えることがおもしろいのです。実際、生活の中では、言葉とイメージは別々ではありません。会話をするときもテレビを見ているときもそうです。すべては相互に作用しています。

言葉の役割、絵の役割

絵本では、時間的な流れは主として文章が、空間は主として絵が担います。しかし、どちらが主ということではなく、複合的に意味とイメージを創造します。言葉と絵がさまざまなつながり方をすることで、重層的な空間の中に豊かな物語が生まれるのです。そして、そこには読者の言葉とイメージが介入する余地があり、読者の想像力によってイメージがひろがり、物語をふくらませるおもしろさもあるのです。この本は、言葉とイメージ、メディア、デザイン、表象文化など、これまでとは異なった視点からまとめたものです。



今井良朗 編著『絵本とイラストレーション 見えることば、見えないことば』
2014年4月1日発行 武蔵野美術大学出版局

学芸員資格

ゲイブンでは、卒業単位のなかで、学芸員資格を取得することができます。

一般的な学芸員課程履修の場合

卒業に必要な
単位数
124

トータル 143 単位が必要

武蔵野美術大学の場合、学芸員科目の合計が19単位になるので、芸文以外の学生の卒業必要単位は143単位になります。

学芸員科目
の単位数
19

芸術文化学科の場合

卒業に必要な
単位数
124

トータル 124 単位が必要

芸術文化学科では、通常なら卒業に必要な単位(124単位)の外にあった学芸員課程科目19単位分すべてを学科内の専門科目で置き換えられます。

学芸員科目
の単位数
19



03

ゲイブンを飛び出して、 展示会をプロデュースする！

作品の魅力を120%ひきだす、柔らかな視点

UMARTs2013ーうまから うまれる15のアート

展示会を見に博物館、美術館を訪れる人の多くは、そこで働く学芸員の仕事は展示会を作ることと思うかもしれない。確かに、作品というモノを展示して、展示会を作るのは、学芸員の重要な仕事のひとつだが、多くの人を博物館や美術館に迎え、さまざまな学びの刺激を発信するために、学芸員はさまざまな仕事を担当する。多岐にわたる学芸員の仕事を、ゲイブン生がトータルに経験できるよう、学内外とつながり、リアルな学びの現場を生み出している2つの例をここで紹介したい。

まず1つめは、ゲイブン生がムサビを飛び出して、外部の博物館と一緒に作り上げた「UMARTs2013ーうまからうまれる15のアート」展だ。日本で最初の競馬場が生まれた横浜・根岸にある馬の博物館を舞台に、これから活躍が期待される若いアーティストのサポートと、かつては人間の生活になくてはならず、数多くのアート作品に登場していたが、現代ではあまり意識することのない「馬」に今一度目を向けてみよう、

という2つの思いから始まった。初回となる今回は、ムサビの美術工芸分野で学んだアーティスト15名に、馬を五感で体験してもらい、そこから得た発想をベースに作品を作ってもらい、ゲイブン生がその作品を預かり、馬の博物館の学芸員と一緒に、展示を作り上げた。また、展示と人をつなぐ、さまざまなパブリックプログラムも行い、小さな子どもからお年寄りまで、さまざまな人に馬とアートに親しんでもらった。

展示会とプログラムが非常に好評だったことから、今年夏に、東京競馬場にある競馬博物館にUMARTs2014として巡回することになった。夏休みということもあり、子どもから大人まで楽しめる、さまざまなパブリックプログラムを用意する予定だ。

もう1つは、芸術文化プロデュースコースの3年生を対象にした授業「芸術文化研究Ⅰ」である。ムサビは、アート、デザインのさまざまな領域を学ぶ11学科からなるが、その一つ、工芸工業デザイン学科ガラスコースとゲイブンが連携し、ガラスコース4年生の作品展を、ゲイブン3年生がプロデュースする

Teacher
杉浦 幸子
楯 義明

UMARTs2013ーうまから生まれる15のアート 活動風景

Teacher
杉浦 幸子

Glass X Geibun Project 芸術文化研究Ⅰ

「GCP」を履修した学生は、美術館の現場と同様に、「学芸」と「運営」の仕事全員が担当して、一つの展示会を作り上げ、人にそれをつなげるプロセスを通して、学芸員の仕事を体験的に学ぶそうですね。去年、学芸リーダーを務めた河野朋佳さんと、運営リーダーを務めた和田明莉さん、リーダーをやってみて、どうでしたか？

W 2年生までミューゼオロジーの授業を受けて、展示会の運営に興味を持っていたので、自分からリーダーに手を挙げました。全体を俯瞰して見ることで、それぞれの仕事に理解できて、オールマイティに対応する力がついたと思います。

K 各部署の仕事をしているいることができたのが面白かったです。あと、展示会が終わった後、学芸リーダーとして、カタログを作ったのですが、そこから、諦めないこと、途中で投げ出さないことを学びました。何かしら記録に残す、って大切ですね。

「リーダーや担当を決める時、全然揉めなかったそうですね。現場に対するみんなの前向きな気持ち、とてもゲイブン生らしいと思います。プロジェクト全体を通して印象的だったことは？」

右 河野 朋佳 4年生
左 和田 明莉 4年生



K 積極的に仕事をこなす人が多かったことです。リーダーとして仲間を支えようと思っていたのですが、みんな、自分からどんな仕事をしてくれたので、驚きました（笑）。

W 実際の展示会作りには、みんなが気付かないこと、担当に振り分けられないすきまの仕事があるんだなあ。そこに気づいて、すきまを埋めるのも、リーダーの大切な仕事だと思いました。もう一つ、ガラスコースの学生さんが「キュレーションが何だかわからない」と話してくれたのが印象的でした。ゲイブンではいつも普通に話していることが、他の学科ではそうじゃない。モノを作る人と一緒に展示会を作ったことで、ゲイブンの中だけの授業とは違う学びができたと思います。

K ただ一つ、ちょっと心残りだったのは、組織や役割に捕われて、展示会のコンセプトや、作品をどう見せるかを、もっと深く考えら

「Glass and Geibun Project」通称GCPを、課題として行っている。

ガラスコースの各学生作家を担当し、制作のプロセスをフォローし、作品を生かした展示方法を彼らと考え、展示を行い、展示と人をつなぐパブリックプログラム（教育普及活動）を行い、カタログを制作する「学芸の仕事と、広報や記録施設管理、総務、経理、開発といった「運営」の仕事、その両方をゲイブン生は体験する。

同じ学内にいながら、実はなかなか接点のない、モノを生み出す学生と、そのモノと人をつなぐ学生が出会い、一つの展示会を作り上げる。どちらの学生にとっても、GCPは大きな学びを得られる場となっている。ゲイブンで学ぶ学生の多くは、博物館で働く時に必要な学芸員の資格を取る。アートと人をつなぐ、その魅力を最大限に引き出す展示会やパブリックプログラムをプロデュースする。この具体的な活動から得られる学びが彼らの将来に与える影響は、限りなく大きい。

PROJECT PROFILE 2013

- 人数 / 17名 (1・4年生・大学院生対象)
- 形式 / アーツプロジェクト
- 期間 / 9ヶ月
- 分類 / 展示会企画・運営

PROJECT PROFILE 2013

- 人数 / 23名 (3年生対象)
- 形式 / 3年生選択必修授業
- 期間 / 4ヶ月
- 分類 / 展示会企画・運営

「反省点も含めて、社会に出る前にこうした実践的なプロジェクトができたのは、いい経験になりましたね。」

K 確かに。GCPに参加した学生さんの卒業制作を見て、GCPの影響が見えて、作り手の変化に自分が関われたかな、と感じたのは、嬉しかったです。そしてなにより、ゲイブンの仲間たちにすごく力があることを実感できたのも、すごく嬉しかったです！

W 本日にゲイブン生のポテンシャルは高いよね。今年の3年生が、どんなGCPを作ってくれるのか、楽しみです！

04

Teacher
高島直之府中市美術館リーフレット
編集プロジェクト

作品に出会い、作家の声を聴く。
《編集力》で美術館と来場者をつないでいく。

INTERVIEW

神山亮子
府中市美術館学芸員

開設準備室を経て、2000年7月より府中市美術館学芸員をつとめる。公開制作には、開館時より関わっている。



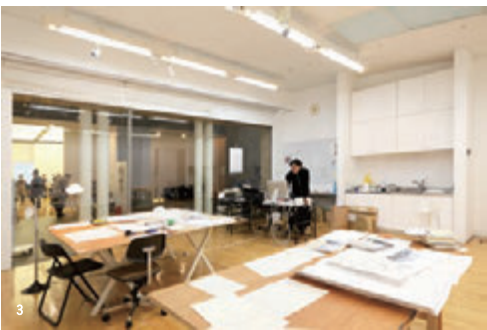
そこは、作家と市民が出会う場所

「公開制作室」は美術館の教育普及活動のひとつとして、制作活動と一般の人の理解をつなげる場として構想されたもので、美術を普及するという目的が強い場所ですね。訪れる人は、料金を払って作品を見に来るという方たちに加えて、立地的にもふらっと散歩のついでにテニスクラケットを持ってくるような方もいます。作家にとっても、作品になる手前の時間を外にさらけ出しているような場所であるのと同時に、見る人にとっても作品というフレームがかっちり固まっていない状況の中で作品に出会う場所なのかな、と思っています。その魅力をうまく伝えていくことが難しいな、というのが10年以上関わっていて感じていることです。プロジェクトを始めてから、インタビュ映像とリーフレットに、美術館からの視点ではなくゲイブンの学生の視点が入ってくることが、われわれとしてはとてもありがたいですね。お客さんにとってはそのインタビュ映像やリーフレットが導人となって、「見る」

という点で作品へのアプローチの幅が広がります。いっぽうで、作家にとっては制作している時間がけつこう不安であると思うので、インタビュを通じて学生の客観的な視点からの情報や資料を提供する、という効果も発揮しているのではないかなと思っています。学生もいろいろと下調べをして、かなり資料を読んでもからインタビュに臨んでくれていますし、作家もそんな学生の姿勢を見て、嬉しいという気持ちと、熱意に応えようというふうを考えて、話しているのではないかなと思います。

「学びの場」としての美術館

美術館は教育という機能も持っている場所で、最近では近隣の教育機関との連携というのが大きな課題としてあげられていますし、ムサビの学生とこういう形で授業ができることは館の方針と合致しています。ゲイブンの学生は現場の実践力に加えて、それをまとめる編集も勉強していて、そのための編集ソフトの操作、映像編集など



1. 石田尚志公開制作風景（2014年）
撮影：加藤健 2. 3. mamoru 公開制作、パフォーマンス風景（2013年）
撮影：下道基行 4. 府中市美術館内、公開制作室

作品と実践的に関係して
協働で作り上げる

府中市美術館は、ムサビに近い距離にある公的ミュージアム。美術館はむろん作品企画展示の機関であり、展示された作品はアーティストの構想が結実したところの「完成品」です。でもそれに先立って、作家が作品を生み出すアトリエにおいては、彼らは表現に行き詰まったり、解放されたりするところの、芸術が生まれる「永遠の現場」というものがあります。この公開制作室は、まさにその作品発生の萌芽と醸成の過程を伝えようとする目的をもっている。このアーツプロジェクトは、それを鑑賞者に生き生きとたたかちでメッセージ化できないか、という考えから、美術館からの要請もあって始まった。その公開にあたるアーティストの仕事の経歴や全容を把握するため、実作品の鑑賞も含めて調査し、的確なインタヴューとなるように、皆で要件を共有し議論します。スケジュールを調整して、進行、記録、インタヴュー、映像制作、スチール撮影、編集・デザインなどの役割分担を決定し、リーフレットの作成に向かいます。ときには、アーティストのパフォーマンスの演者として参加したこ

ともありますから、関わりは「編集」

だけとは限りません。つまりは、その作品に実践的に関係して協働で作り上げます。そこではふだん知りたがたいアーティストの制作思考とその熱気を分かち合うことができるわけです。それは学生のかげがえのない経験となつて、キュレーションや教育普及のABCを学ぶことになり、大学での研究の大きな励みとなつて、研究はより深まります。いま美術館は大きくかわりつつありますが、ゲイブンでは、美術館本来の機能とその変化をみつめながら、実践的に関わろうとしています。そのひとつがこのプロジェクトです。

高島直之



公開制作リーフレット
上 / mamoru 氏（2012年度）
mamoru（まもる）
1977年生まれ。普段の生活では聞き流してしまうような音を、意図的に、集約的に聴くことで、新たな価値を見つける作品を制作している。
2010年「Tokyo Experimental Festival」（トキョーワンダーサイト本郷）にて最優秀賞受賞。

下 / 石田尚志氏（2013年度）
石田尚志（いしただかし）
1972年生まれ。20代前半に武蔵野美術大学黒坂圭太教授のアニメーションに強い影響を受け、独自のドローイングアニメーション技法を開拓。
代表作に「フーガの技法」（2001年）など。五島記念文化賞美術新人賞受賞。多摩美術大学准教授。

PROJECT PROFILE 2013

- 人数 / 5名（3、4年生対象）
- 形式 / アーツプロジェクト
- 期間 / 4ヶ月
- 分類 / 編集

